

昭和四十四年十一月二十五日 第三種郵便物認行
 昭 和 四 十 九 年 十 七 月 十 五 日 發 行 (每 月 一 回 ・ 十 五 日 發 行)

(通第三〇六号)

慈

光

第二十六卷

第十一号

次

父 母 因 縁 …………… 近角常観 …… (1)

近角先生「法信抄」 …………… 堤 善継 …… (6)

求道の中心 (二) …………… 福島政雄 …… (9)

高原憲先生聞書 …………… 平岡 坦 …… (13)

念 仏 詩 抄 …………… 木村無相 …… (18)

智慧の念仏と信心の智慧 …………… 花田正夫 …… (21)

父母因縁

近角常観

一仏の名号は仏の方から来るところの恵みである。南無阿弥陀仏というは、仏の方から汝の親であるぞと自ら名告りて我々を呼びたまう声である。

その名号を聖人は慈父と名づけられた。名号を慈父とまで喻えられたのは、聖人が一通り仰せられたのでなく、それには大いに味いがあることである。先ず私の経験について案じますに、自分がこの人生上に苦しんで、終に何処にも安ぜられず、世の中に真に自分に対して同情してくれるもの、真に恵みあるものは無いかと、求めても得られざる有様は、人の友を求め、孤児の親を求めて得られない有様である。そこへ仏は悪しき者を恵む親なり、我等の父なりと光がさして来て、ここに南無阿弥陀仏の父に遇うたのである。そこで徳号の慈父と云われた。ただ漫然と父なりと喻えたのではない、実験の味である。その工合はどうかというに、心中が一つ開け、心中親に出遇うた心地を慈父といわれたのである。

者が初めて仏の光を微塵ほどみとめたとき、真に喜びの心の開發するところの光明なり、名号なりである。

名号は親の心、仏陀の喚声であると云うてしまえば、或は名号は称えずともよいと云うに似ているが、決してそうではない。南無阿弥陀仏というは親それ自身であって、我等の口に称えるのではないと云うてはならぬ。そういうてしまえば名号という値打がない。

何故に、名号をもって親を示したかというに、親の名を称えさせて、親の恵みを知らしめるべき名前である。もう一つ極端に云い放てば、信心のおこらぬ前、親に遇わぬ時から、親の名前を呼んで居ったが、いよいよ親に出遇うた時、ああ親は有り難いと喜ぶことになるのである。名号は親の名であるが、我々の口にかげずに向うにのみ置いては何時までも我々にとどかぬのである。

法然上人は称えよ称えよと教えられた。南無阿弥陀仏は我々の称えるものである。しかし、親を探し求めながら称えるのと、親を見出して、ああ父よとすがる思いから叫び出したのとは大いに味が違う。親の恵の知れたとき親の名を称える、我々はこれを忘れてはならぬ。

親鸞聖人は行巻の巻頭に、

謹んで往相の回向を案ずるに大行あり、大信あり、大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。

又、一方に光明の母ということも、つまり一念同時であるから、父母に前後はないけれど、成程、仏こそ我を恵む親と分った時、云うべからざる喜びである。即ち仏は慈悲の塊と分ったとき、その仏とは即ち南無阿弥陀仏である。慈悲の塊とは光明の悲母の実験である。光明の母とは懐かしき温かな光明の懐に摂められた味である。

「金剛堅固の信心は、仏の相續より起る」で、常に相續して照らして下さる光明が、我が心の底に届いて、名号の意義をああ有り難いという心が起って来たという光明名号の因縁の味は、信仰の一念の開發する当時の有様を味うのでなければ知ることは出来ぬ。

この光明と名号の因縁のことは、その本はずでに竜樹菩薩の上において、般舟三昧を父と為し、無生法忍を母と為すとあって念仏三昧と大悲光明の照して信心が頭れてきて、仏の恵みこそ有り難いと、直に歡喜の心が起るのは、あだかも菩薩の初歡喜地の境地と同じことであって、求道

と云われている。我々の身を離れた大行大信でない。我が口に称うる念仏、我が心に入る大信なりと云えばとて、我々がこしらえた行信でない。仏の恵から来た行信である。南無阿弥陀仏も仏の恵み、有り難いという信心も仏の恵み、共に仏心仏力が我々に来るのである。これを先ず今日の言葉で云うならば絶対と相對との合一が宗教である。

絶対がどこまでも絶対であるならば宗教にはならぬ、又相對を如何に集合しても絶対にはならぬ。沢山の數知れぬ仏があっても宗教にはならぬ。我々と仏陀、相對と絶対ととろけ合って、我等と仏陀と切っても切れぬ關係が宗教である。大行大信は我々の方に屬するが、それが仏陀の光明名号の因縁から催さるるところの仏陀の回向である。信心も我等の信心なれども、仏陀の恵みの信心、仏力の届いたのが信心、称名も力んで称える念仏でない。

これは宗教の極々真味の相對絶対の一致、仏凡一体の真義があらわれてある。それはどうかというに大行の仏名を稱する一念にこもってある。仏の方に唯成就してあるばかりで稱えずば我々の方にあらわれぬ。信も亦みずから力んで空に信するのではなく、仏の偉大なものを信するのだから一致になれるのです。この信心は仏の賜物である。称名もまた稱えねばならぬという力味ならば絶対でない。又名号は仏それ自身じゃと向うに置くのならば、相對に關係が断

たれる。

親鸞聖人は南無阿弥陀仏は如来招喚の勅命、徳号の慈父であるが、大行というは無碍光如来の御名を称するなりとあり、この称えるところで一致である。ここが何とも云えぬ理屈でわたられぬ妙味である。歎異抄には、

親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。

とある。「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」というよき人の仰せは大行がある。「信ずる」は聖人の信仰である。

私は初めにこの「信」の方に目がついた。聖人は「たとえ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず」何でもかまわぬと空を信じたのではない、信ずる所の確かなものがあつた。念仏の語を信で受けた。如何にも偉大なる仏の慈悲が有り難いと信じたのである。しかしながら信せにやならぬという力味ならば、手足に力を入れたので信の立場がない。人生もしこの念仏無くは何を信ずるぞ、唯この念仏の偉大なるものを信ずるところで安心が出来るのである。しかし若しそれ故に念仏が大切なりと念仏にとどこおるならば誤りである。しからば如何にすべきかというに、信ずるも真に信じ、

以上によって名号の意味は明らかになつたであらう。信前、未だ親に遇わない以前に称える念仏も親の名前を呼ぶのではあるが、親にうとい念仏である。このように称える間に親の恵みがわが心に届いたとき、親に初めて出遭うた嬉しさのあまり、嗚呼父よ、と叫んだ念仏が真の念仏である。この喜びの叫びを出さんと思ひ立つ心の起るとき、この時早く、すでに光明の懐に撰取せられる。そのようになるには、大悲の切なる催しから、迷いをほろぼし悩みを救い遂げようと念じたまう光明の母のたわものである。聖人の和讃に、

○尽十方の無碍光は、無明のやみをてらしつつ
一念歡喜するひとを必ず滅度にいたらしむ。

○無碍光の利益より、威徳広大の信をえて
かならず煩惱の氷とけすなはち菩提の水となる。

○罪障功德の体となる、氷と水のごとくにて
氷多きに水おおし、障り多きに徳おおし。

というである、皆これ光明の方から言うてある、光明が円融して我等の心入る。又、

○名号不思議の海水は、逆謗の屍骸とどまらず

衆悪の万川きしぬれば、功德のうしおに一味なり。

○尽十方無碍光の、大悲大願の海水に

煩惱の衆流きしぬれば、智慧のうしおに一味なり。

称うるも真に称うる、此二つの円満に結びついて、無暗と信ずるのではない、力んで称えるのではない、師教に従い仏願に順うて、その通りに信ずるのであるから、仏陀の本願の勅命と、此方の信心と違わずに、信じた通りに唯念仏するのである、これで一致ということをよく味わねばならぬ。もしこの如くならず、念仏せよという師教であるから念仏するというならば、それは律法主義に取つたのである。「念仏せよお助け下さるぞ」との教を聞いて、ああ有り難いと受ける、これが信仰である。

親鸞聖人の『愚禿鈔』上下二巻あるが、その上巻は南無阿弥陀仏の偉大なことを説き、下巻は信心を詳細に説いてある。この両巻は教行信証でいえば、行巻、信巻にあたる。行巻は師法然上人の教えられた念仏の意義を述べ、信巻は聖人の自己の信心を示されたのである。而してその愚禿鈔の両巻の開巻第一の題下に、各々、

賢者の信を聞いて、愚禿が心を顕わす

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり

と標示してある。賢者の信というのは法然上人の教示で、如来の本願、広大の仏の恵みである、即ち選択集一部である。愚禿の心とに、それを頂いた聖人の心中で、三信釈がこれである。

これらは光明名号で云うてある。名号の因に温き光が心にさしそい、無明の黒暗を破つて下さる、これによりて信心を生ずる。この信心がまた光明名号の外縁相統によって報土の真身を得証する。初一念の時ばかりの念仏でなく、一期の間称える念仏である。初めの一念の時、照破の利益を与えられた光明は、一生の間撰取し、護念して下される光明である。換言すれば父母は子を養育するのである、始終まもられて報土に入るのである。これを行巻には讃歎して次のように云われている。

然れば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到つて大般涅槃を証し、普賢の徳に遵(したが)うなり。

この如く常に念仏しつつ光明の懐に在りての生活である。念仏は親そのもののあらわれである。この念仏の大行は非常の功德、無上の大利である。この光明は八万四千の大光明にして如何にしても我等を捨てたまわぬ撰取の光明である、この信仰生活で未来は真身を証するのである。

最後にすこしの経験を加えて申しますれば、私は最初念仏を称えず、先ず光明の方に気がついた。其時の経験とは仏は慈悲の塊りであると書いておいた。これは念仏を称え

る味を知らずに仏の恵みばかりを喜んだ。これはむしろ光明の方である。

しかし慈悲は光明である、光明は名号によって現われ、名号は念仏によって現われる。近頃は始終念仏を唱えることが非常に有り難く感じさせて頂きます。私の一身上の道行きで云えば信じて称えるのが有り難いことでありませぬ。

昨秋、博多の万行寺に参詣した。有名な七里恒順師の寺である。師は博多にあって、寸暇をおろそかにせず、来訪の人を一々引見して信仰を勧められた。百人内外の求道者が常に門前に宿泊していたと云うことである。師が或年、京都に上られたとき、一人の同行が同じく上京して同じ旅館に投じ師の隣室にあり。寝につくにあたって、何気なしに、「弥陀大悲の誓願を深く信ぜん人はみな、寝てもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべし」とあるのを思い出し、師に「寝ても」とあるのは臥して居ることか、寢ていることですかとお問いた。師は「さめてもとある対だから、寢て居ることである」と答えられた。此人また問うて、寝人って居りながら能く念仏すべきでしょうか、と。師曰く「然り能く念仏し得べし」、又問うて、如何にして為し得べきでしょうか、と。師曰く「それには祕伝がある、望みなら教えてよいが、併し君は寢て居ぬ間称名し得るのか、君にこれが出来のならば、寢て称名することを教

近角先生「法信抄」

拜復 御老体益々御機嫌よく御暮し遊ばされ候御事、御慈悲のお護りとお喜び申上候。

楮(さて) 御来示の法悦何より結構と存候。御来示通り私共は全く仏様を忘れがちに候、仏様を捨てる私共に候しかるに、その私をお忘れなく憐みたまう御仏に候。親を捨てる私に道しるべをして下さる姥捨山の親様に候。この極りなき御慈悲、親心には如何なる私共も頭を下げていただくばかりに候。

奥山に枝折りくは誰がためぞ

親の身捨ててかえる子のため

かくの如く、一旦頭を下げていただき候も、矢張りもとの横着心は止まぬものにて、親を忘れ勝ちに候。しかるに、その忘るる私を忘れたまわぬ親心なれば、跡もどり跡もどりにして御慈悲に立ちかえりて仰ぐばかりに候。

或人の夢中の靈告に

えよう」と。この人慚愧してものが云えなかった。ところが夜半に眠りが醒めて見ると、師の念仏の声が絶えることがないので、怪しんでこれを窺うて見ると、師は熟睡していられて、しかも念仏の声は曉になっても止まなかったという。この人が私に直接に語ってくれ「この事は心肝に徹し、今なを忘れられませぬ、実に尊いことであつた」と。

右の和讃は七里師が晩年に至って何時も諷誦して人に聞かせられたもので、師の信仰を最もよく述べたものである。これと同時に、播州の最勝寺、後藤祐護師は、明治十九年頃から、日課念仏を三万遍つとめられたが、其後宗教問題のために非常に奔走せられたために、日課念仏の数を満たすことが出来なかつたので、事件が落着いた後にこれを補われた。師は非常に罪悪感が強くして、常に、

極悪深重の衆生は他の方便さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ浄土に生ると述べたまう

という和讃を誦しつつ「我は罪惡僧なり、かかるものを助けたまうことかたじけなし」とひとりごとをしつつ念仏せられたということである。この和讃はまた後藤師の信念をよくあらわしたものであろう。この二首の讃文、一つは機、一つは法、相對して両師の面目を發揮しているといふべきである。

堤 善 繼

跡もどりくして辿るらん

甲斐なきことに心迷いて

とこれあり候。歎異抄第九章の意味に候、天におどり、地におどるほどによるこぶべきことを、よろこばぬにて往生はいよく一定と思いたまうべきなり。

〔給〕品をいただき御礼が出来ぬといえは、御礼が出来ぬともよいではなく、御礼が出来ぬくらいならば与える必要はない、御礼の出来ない人にこそ与えんというが救済に候。我等もよろこべるくらいならば大悲大願の必要もなく、その喜べぬを憐みたまうが大悲大願に候。跡もどり跡もどりにして大悲大願をたどり奉る次第と、先は久方振りにて紙上にて御法話申上候、御身体お大事になされ下され度候

大正三年三月三十一日

頓首

堤とよ子殿

近角常観

待史

友次郎様にも同様御熟読願上候
入吉の城の石垣が見える様に候

(二) (註) 先日多良木町の私の実家に行きましたら近角先生の御手紙を表装したものがありませんので借りて来て写しました。これは私の実母が大正九年六月(私が十一歳の時)死亡後、父宛に戴いたものです。(筆者)

母危篤の状態の時、近角先生から戴いた電文

「オクサマノ、オビヨウキ、オサツシモウス。
アテニナラヌワレラノココロボソキヲシロシメシ、ド
コマデモオミステナキ、オジヒノウチニ、ゴヨウジョ
ウライノル」

近角先生弔慰文

謹啓仕候

御夫人御病中御慈悲につき打電申上候処、驚くばかりの歡喜踊躍の法悦の間、遂に往生の素懷を遂げられ候由、当時早速御悔み申上度存意の処、長男少々病氣のため取込みその後転地等のため筆紙をとるの暇なきところ、御丁寧に多額の御芳志を辱うしながら御礼申上度存じつつ

て、その虚仮の心も親心のために充実さるるなり。さればこそ真実信心とは申すなり。されば和讃にも

本願力にあいぬれば、むなしくするひとぞなき

功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へたてなし

とあるもこのころにて候。いかな煩惱具足の濁水も、如来清浄の願心のやるせなき御心の源泉よりそそぎたまう御慈悲の水は満ち／＼て遂に濁水も間隔なき御力のために打勝たれ、我等願志(しんに)煩惱の胸の中にも如来御慈悲の充実したまえばこそ、如来回向の信心と申す次第に候、これを名づけて信の一念という。

その信の一念の溢れ出る念仏が行(ぎょう)の一念に候。さればこそ大行には常に諸の善法を撰し、諸の徳本を備う、極速円満す真如一実功德の宝海なりと仰せられ当知此人為得大利、則是具足無上功德(まさに知るべし此人大利を得となすなり、則ちこれ無上の功德を具足するなり)とこれあり候も、畢竟この充実せる積極の力に候。

しかし、是いささかも自己の力に非ず、むしろ我等の力なきを憐みたまう御慈悲の顯現に外ならず候。信心の現世当来の利益も、道徳の行動もこの真実に外ならず候

昭和二年四月十四日

近角常観識

失礼仕り候。

併「今生夢のちぎりをしるべとして来世のさとのまえの縁を結ばんとなり。我おくれなば人に導かれん我さきだたば人を導かん、生々に善友となりてともに仏道を修せしめ、世々に知識となりてながく迷執をたたん」とある古聖の金言も、今更御身の上に相成候事と存じ候。畢竟御夫人の御示寂も要するに善巧撰化の思召とおぼしめされ、人世火宅無常の間、飽くまでも如来大悲の常住の御光を御示し遊ばされ候事と御いただき申された候。

遅延ながら封入の為替、御中陰御靈前に御香御供え下されたく奉願候。いよいよ明後二十五日より第十回求道会開講のつもりに御座候。ここに御弔慰かたがた御芳志御礼申上度、早々頓首

大正九年七月二十三日

近角常観

堤重蔵様

(三)

抑々親鸞聖人は浄土真実の教行信証即真宗と名づけたまへり。この如来の真実が聖人御教の根本中心なり。真実というは不実を悲愍して飽くまで見捨てたまわず、いかな姥捨山の不孝の子も、親を捨つる我身のための道枝折なりと聞きたる一念、いかなる不実なる心も折れ砕け

歎異抄の特異点

歎異抄はその味いを教理的一般的に言いあらわさずに聖人が実験的に個人的に仰言る点が特に我等個人々々に如来の御光を届けて下さる。

○親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。

○親鸞が申すむねまたもてむなしかるべからずそうろうか○親鸞は父母孝養(けようよう)のためとて一遍にても念仏もうしたることいまだそうらわす。

○親鸞は弟子一ももたずそうろう。

○親鸞もこの不審ありつるに唯円坊同じ心にてありけり。

○さてはいかに親鸞が云うことを違うまじきとはいうぞ。

○弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり云々。

全体信仰は個人的なものである、而して何れも聖人自身の述懐告白の個人的である上に、殊に何れも絶対の態度のあらわれたる言葉である。念仏一遍にてもとか、弟子一人もと云う如き心地よきままでに一点の私を雑えず、半点のほからいを加え給わざる言葉の如きはそのいちじるしい点である。

近角師「歎異抄講義」

求道の中心（二）

福 島 政 雄

死より生へ

私は大正五年一月に二十八才で結婚したのであるが、當時家内は十九歳であった。そして家内は子供の時からキリスト教の中で育てられており、十八歳の秋には洗礼も受けていた。私は家内からそのことを聞いて心が混乱した。それで私はその夏八月に本郷森川町の求道会館で開かれた近角常観師の夏季求道会には殆んど強制的に家内を連れて行き、一週間通った。家内は熱心に聞いたが、求道会の終了日の午後先生にお目にかかって「お話には感銘しましたけれど、木像やお絵像を拜む気にはなれません」と先生に申し上げたところ、先生は声を大きくして「そんなことを云っている間はまだ問題ではない」と申されたので、その時仏教にも何かあると感じたというのである。

その後家内は二十一歳の時、家庭問題で非常に苦しんでもういよいよ身投げでもして死のうかと決心した時に、この自分の心持を知ってくれるものが居ない、夫も知らず、

夫の両親なんかむろん話の出来たものではない。それから自分の里には母親がいるのだが、その生みの母親にもこんなことは話ができない、たった独り誰にも自分のこの心持を知られずに、そして三歳の幼な子を残して死んで行かねばならぬというところまでつきつめてきた時に、何とも云えない淋しみと悲しみのどん底に落ち入った。その時、三年前の夏、近角先生の講話の折に承わった歎異抄の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」という一語がふと想い起され、急に胸の内が安らかになり、生きるも死ぬるもお思召のままにという不思議な信樂（しんげう）の想いが湧き、その後一週間ばかりは大歡喜の心が続いたというのである。私も私の妻も先生のお導きによって念仏の一道に徹し、親鸞聖人の

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と申された尊いご述懐をそのままに味わせていただきな

がら、今日老後までをご法義によって生かされているわけである。

厳格な先生

だが、近角先生は実際問題に対しては厳しいお方である。もう先生の晩年に近いころ、私が広島にいたところに先生をおまねきしたのである。

実は十年も前から、先生に広島に一度きてお説き下さいということをお願いしていたが、広島にはいかぬと仰言るのである。広島には親鸞聖人のご法義のことをかねて聞いている人が沢山いるだろう、そしてそういう人々は「あの話か、自分はもうわかっている」という調子で聞くにちがいない。そんなところに行っても、何も自分のいうことが通るものではない、だから広島なんかにはいかなないと頑張っておいでになったけれども、十年も過ぎてからひょっと来て下さった。そしてその時は、非常な熱心さで聖徳太子のことをお話になった。

私自身はお叱りをうけたことがある。三十台の当時の私というものは、これはまあ申上げるのも恥しいような、さうざんな状態である。二十六歳でその信心の道が開けたならば、三十のお前は立派なものだったろうなどと思われるかもしれないが、決してそうではない。三十台の私というもののはまことに言語道断のありさまであった。それからず

つとあとのことになるが、それは白井成允氏に関連するのである。

私は近角先生のところへ行って「白井さんと私は氣持がしっくり致しません」と訴えた。ところが先生は即座にお叱りになった「どっちもどっちだ。両方だめだ。白井君が理想主義なら、君は自然主義だろう」といってうんとお叱りになる。

それから西洋から帰ったころ、私はまた変な氣持になっていた。というのは、西洋にいた間ドイツに一番ながくおったから、ドイツの田舎の純真な娘さんがたと懇意になったりして、それから帰ってくると、いつの間にかこの西洋人の心持というものが私にうつっており、そして人間の煩惱というものを大切にものだというような氣になった。で、よせばよいのにわざわざ先生にお目にかかりにいつて、「人間の煩惱というものは、大したものだと思います」と云ったのである。それにひどくお叱りをうけた。「西洋にいった人間はすぐそんな氣持になる。大間違いだ」とお叱りをうけた。それやこれやで、まあ三十台の私というものは、さんざんありさまだったのである。

心の落着き

それならば、そういう私が、少し心が落着き始めたのは、いつからか、こういうことになるのである。ところが

また、こういうことがある。四十歳をすこし越えたころ、その頃は広島にいたが、讃岐の高松、あそこに夏期講習会の講師として行った。そのとき高松には弁護士をなさっていて、これは近角先生の教えを徹底的に聞いて、親鸞聖人の道に、眼が開けておいてになっていたところの酒見忠勢という方がお見えになった。その酒見さんが、最初の日の講話が終ったあと、私を自動車にのせて、何里か山の奥の方の塩の湯というところに伴れていかれて、そこで一緒に泊ったのである。

その時、晩餐の食事をしながら、その間に酒見さんは、何気なく句仏上人の話をされた。酒見さんの気持では、句仏上人というのは墮落坊さんだし、そうして気の毒に思うというのである。それは坊ちゃん育ちの人で、だんだん周囲の人から誘惑されて、まずお酒の味をおぼえる、それから女遊びをおぼえる、というようなことにまで発展して、とうとうしまいにご法主としてあるまじき振舞いをされるというようなことで、法主の位を退けさせられた。実は気の毒な方である。ところがその墮落坊さんである句仏上人のために近角先生は命がけて一生懸命につくしておいでになる。近角先生は、全国を回って句仏上人のために説いておられたのである。そこで酒見さんのいわれるには、これはこれ人間業とは思えない。これこそ、仏さまのおはたら

家内なんかも、臼杵先生はありがたいけれども、お話を聞いてみるとたいいわからない。しかし一時間のお話のうちで一つ自分の心にしみることがある。一つあると、それでまあ十分だということを書いていた。その通りである、なかなかお話はむつかしかった。

ところが、その臼杵先生が広島浄法寺というお寺でお話をしていられる時に、私が聞きに行ったことがある。その時のお話は、法華経の中にある長者窮子の譬えの話である。この話を懇切にお話なさって、これは譬えだから、父親である長者は、もう死ぬるといふその直前に、子供に家屋敷、金銀財宝をすっかり譲り渡して、それから亡くなるのであるけれども、実際問題としては、この家屋敷、金銀財宝というのは、親の生命に譬えてある。親というものはこの世の生命がおわると同時に、その全生命が子供が六人あっても十人あっても、その一人一人の子供に親の全生命が入りこむものであるという、こういうお話であった。

そのお話に私は、非常に心を打たれ、それから始めて自分の生みの親というものが、わかり始めたと思うのである。そしてこれもおもしろい話だが、私の結婚問題の時に、父親が私を八畳の間で、前に坐らせて、改まって「お前にもそろそろ家を持たせようと思う、結婚させようと思う、が結婚についてなにかお前の考えがあるか」そういうこ

きであると感じている。酒見さんは、何気なく、自分の感想として私にそういうことを静かにお話になったのだが、その話が私の胸にピンときたのである。

いやそれは、句仏上人の問題ではない自分の問題だ、ということを感じて、非常に私は胸を打たれた。自分こそ、五十歩百歩で同じ人間である、同じ墮落をやっているのだ、というようなことに一瞬の間に眼をさまさせられた。その時から、私の女性に対する迷いというものが醒めはじめたのである。はじめたと申上げるのは、それではいま白髪の老人になっているからすっかり抜けていったといわれるかもしれないが、そうもいわれない。それは大分抜けたとは思えけれども、やっぱり生きている限りは、なにかこう、そういう迷心がどこかに残っていると申上げるのが、まあ正直な話である。とにかく、その時から醒めはじめたということは確かである。

臼杵祖山師

そしてもう一つ。私は広島時代、臼杵先生のお話を聞きはじめた。臼杵先生は九州中津にお住いになっていた。月に一度ぐらいは広島においでになり、そしてお話をされた。学校の仏教青年会でもお願いして、そのたび毎に一度ずつお話を聞いていた。もともと臼杵先生のお話は難しく、聞いてなかなか意味がわからなかったのである。私の

とをやさしくねんごろに暖い心で聞いてくれた。ところがその時の私は心がひがんでいた。その時の父親は五十七、八歳だったと思うが、相当白髪が目立った。その父親の白髪頭を私はじつと眺めながら、その白髪の親爺に、自分の若い心がわかるものかと、こう考えた。そうであるから、せっかく親がそんなにして暖かい心から尋ねてくれたのに、なにもこれという答えをしなかったようである。沈黙である。沈黙の反抗である。そしてそのまま熊本から東京へ行ってしまった。

今から考えると、その時、父親はさぞなげなく思ったであろうし、そのことを思い出すと、今でも眼頭が熱くなる感じがするが、私はそんな有様だったので、実際親を親とも思わない生活態度というか、言語道断の有様である。

それが今の臼杵先生の長者窮子のお話を聞いてから、ほんとに親というものはそうであったのか、その時はもう母が死んでから十年余り、父が亡くなって五、六年たっているところである。もう生みの親はこの世にはない。この時に始めて始めて、生みの親というものがわかり始めた。その時からの私というものが、この生みの親というものはこの久遠の仏のまことを私に伝えられるうえの大事なご縁である。縁ということ非常に深く感ずるようになった。それからして親ということが解り始めたようなわけである。し

かし、時すでに遅しである。親が生きているうちに、そういうことに目が醒めたならばまだしもであったろうけれども、親にはなんともいえない淋しい思いをさせたままで別れてしまったかと思うと、私自身が如何に親不孝ものであ

るかということを知りなると、考えるのである。けれども、そういうことに眼が醒めるようになったのは善知識のお蔭である。

高原憲先生聞書

平岡 坦

まえがき

昭和四十五年二月二十日先生はついに亡くなられました。全年十月、先生が主宰して下さった聞思会は、先生のあとを偲び、皆で集いました。その時「先生からの聞法」としておこがましくも御披露したものであります。

一応順序だてて見ましたが、一項目々々々が始まりであり又そのまま最終のものであります。

仏法に無知な私に、先生は決して仏語を用いず、吾々の日常生活の中かな素材をとらえ、究極のものは何であるか

を述べて下さいました、それは私にとって他では得がたい誠に貴重なものであります。いざまとめようといたしますと、色々のことが走馬灯のように次から次に思い出されて、仲々思うようにまとまらないままに、ようやく一通りの筋道をならべました。或は冗長にすぎ、或は意を尽していないことを私自身も感じますが、何よりも恐れますのは先生の御意志に反することがありはしないかということであり、お読み下さる皆様のお力で補って頂き、或は御叱正下さいますようお願いいたします。

昭和四十六年六月十日

人生最大の落し物

人生最大の落し物は、自己を知らないことである。いつかの聞思会の集りで私は思わずこの言葉が出たことがあります。今回、日誌をめぐっている間に、この言葉が先生から戴いたものであるとあらためて知り、非常に驚いた次第であります。

これについて五つの項目をあげ、最後に、人生の最終目標は方向を戴くことであると、そのように話の筋道をたててお話を申し上げようと思ひます。

以下、各項について、お聞きして耳にとどまるものを申し述べさせていただきます。

人生最大の落し物は自己を知らないことである

(人の智慧と、人ならざるものの智慧)

人は、夫々に「これだけは」と生涯の願いをかけているものがあると思ひます。或人は財産を、或人は学問に、又或人は社会活動家として政治にその願いをかけて努力して居ります。その中で、先生曰く「人生最大の落し物をして居る、それは自己を知らないことである」と。

このことについて皆様はすでに御承知のことであり、また、懐中電灯と太陽の光のお話であります。停電の暗闇の中でやっとローソクに灯がともり部屋が明るくなり、其処へ懐中電灯を持って来れば、明るいと思つたローソクの灯

はボンヤリします。そこへバツと電灯がつけば、もう懐中電灯は無用となります。さて私の方が明るい、イヤ自分の方がもっと明るいと思つても、それは闇の世界のことであり、しかし太陽の光の前にはそれ等は全然光を失ってしまいます。こうしたことはよく心得ている積りでも、俺が、俺がといつの間にかスペアのランプを用意して、お互に、是非善悪を言い争っている。それは自分を本当に知らないからそういうことになるのである。仏様のお慈悲の光の前では一切のものが、差別のあるまま、そのまま同じ光のないものとなり、同じ明るい中に出させて貰えるのであります。

又、目は外に向いてある。このことを先生は「人に対しては俊敏なる検事、自分には最大の弁護士。検事は誠に俊敏で、弁護士は自己を弁護するに雄弁である」と仰言いました。

要するに「点をつけて下さるのは仏様だけである。人間同志の評価が何になるう。太陽(仏様)の光明の前に立てはじめて自分の値打が判るのである、そのことを皆忘れている。そこに人生の最大の落し物がある」と断じていられるのであります。

即ち人の善悪、正邪、ひいては損得と、人生の価値判断を人の智慧をもってはかり、ひいては自分の立場を見失っ

て、手おくれでないものは何一つ無いのが人の生涯の姿である、いましめられたのであります。

おのれを知ることからすべてが始まり、かつまたそれが吾々最後のものであると知らせて下さいました。

一、猿芝居の毎日 (世間虚仮)

先生は申されました。「ほんとにネー世間は全く猿芝居の毎日だ、そして、実に名優だ。しかも命がけでこの芝居をやっている」と。

これは、吾々がよく聞く聖徳太子の御持言の世間虚仮をこのように仰言ったのではないでしようか。

そして先生はよく歎異抄の総結文の中の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よるずのこと、みなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」をしよつちゅう申されました。

蛇足であります、これについて、かつて私か苦しんでいました時、私は私の身のまわり、世間の人のすること、又私がおかれています立場は、一切酔興の上のわざだなど思っていました。人は酒が入ると平素と異った姿をあらわすものです。これが吾々の社会生活の朝から晩までのことで誠に正気の沙汰のことは何一つもないなと思っていました。それは私を切ない思いに追ひこむだけでありました。

私も随分たしなめられました。私が何か先生に訴えますと「それは名利ですなあ！」と仰言って、あとは黙っておられるだけです。

ある時に、先生それでも名利ですかと申しましたら「名利だ」と仰言って頑として受付けられないのであります。それで「先生、何も彼も名利だときめつけられたのでは、私はどうしたらよいのですか、全然力が出ません。またどうしたらよいのかさっぱり判りません、何も出来なくなりませ、」と。

こうしたことを再々繰返しているうちに、何時かの日に先生は「名利は捨てられるものでない。ああまた名利だ」と名利に走る自分の姿が判って、その場で反省と転換が出来るものでなければならぬ。一步はずれて外から自分の姿が判るようにならなければならぬ。我武者羅に頭を妙などころに突込んでしまつて、自分では一生懸命やっているとつものものが、ハッと気がついて、自分ならぬもう一つの自分に立ち還つてこの自分の有様を見るところにしみじみとしたものが得られるのです。見てござる、聞いてござる、知つてござる、ですなあ」と仰言って、じっと目をつむっていられました。

「綱引きをしている、綱引きをやめなさい。その手を放せば貴方は楽になる」と仰言るのですが、放せばこちらが

これと同じことを太宰治の小説「人間失格」に述べておられます。太宰自身は最後に自殺したのでありますが、彼が生れたときから家庭にあっては親兄弟に対して、そして小学校から大学までの学生生活と、更に社会に出てからの、これらの間の一切を、一人の人物を道化役者に仕立てて物語っています。世間とおつき合ひをするのは道化役者で事足りるのだ、また道化役者でなければ過されず、世間一切これ道化役者につぎる、等と述べていますが、唯、この小説には救いはありません、そのように太宰自身もその命を絶つたのであります。

酔興だ、道化だと申しても、先生がよく仰言つた「よろずのことみなもて、そらごとたはごとまことあることなきに」のあとに続く「ただ念仏のみぞまことにておわします」ということを知らなかった私は、酔興と道化の牢獄を免れることが出来ません。

たとえ酔興だと判つても、この酔興に、道化だと判つても、その道化に一体自分は何のように処しているのか、またどうあらねばならないのかが判らないのです。

二、一切が名利である (煩惱具足の凡夫)

「一切は名利である」と先生は始終仰言いました。これで

引っくりかえるのではないかと、恐ろしくて放せなかつたのであります。そうすれば楽になることをすこしばかり気付かされました。然し今でも相変らず綱引きの止まぬ私であります。

先生著の『水の味』の中で「無眼人」と題する一文に、提灯屋の二階の老婆を施療患者として先生がお世話をなさつたが、金を頼つて、金を握つてはなさなかつたこの老婆がついに亡くなり、その時、謝礼を持って来られた旧知の婦人に老婆の隠し金の事情を聞かされ、是非とも受取つて欲しいと云つて出された謝礼について手が出た瞬間、死んだ老婆も自分もいすれも異らぬ無眼人だと深く反省しております。

このように、私は始終名利だ名利だをやつつけられておりましたし、何事も思うにまかせぬ自分の心の有様を見まして、考えさせられますことは、人間の身体は実に精巧に出来ていると思うのであります。人の身体は色々の機械がその成立している原理と道具だけの全部を備えています。最近の科学の所産である自動制御装置を人間の身体の持つそれと同じ能力にするには、丸ビルと同じ大きさの装置がある云われ、それを頭の中の脳と、神経系統でその役目を果しているのであります。しかも何処かに故障があれば発熱とか下痢という様な症状をあらわし、その上病氣

を治す自然治癒能力を持っている。このように人間の身体は誠に精巧に出来ているのに、どうして人間の心をもつと具合よく造って下さらなかったのでしょうか、とこんなことを先生に申上げたことがありました。

しかも、この心は生れたときから病氣を持っている。そして自分では病氣を持っていることを知らない。少々知れてもこれを治す方法を知らないし、治してくれる人もいない。親兄弟、恩師、社会の人、誰も教えてくれないし、治してもくれない。今は誰でも学校に学びますが、教師は学問や技術を教えても、人生に最も必要なものは教えてもられないのです。誠に、煩惱具足の凡夫ということを経験して先生はこういうお言葉で仰言っておられたように思います。

三、 仏智 遍満

何もかもわれ一人のためなりき

今日一日のいのち尊し

種々先生から承りましたが、先生が、最後に仰言りたかったことが、この先生の有名な歌ではないかと思えます。

尚これの裏付をするものと私が思いますことは、伝教大師の「道心中衣食あり、衣食中道心なし」の言葉と「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞま

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

聞くからは

称えよ 称えよの

おすすめは

聞けよ 聞けよの

おこころか

// 弥陀の名号

となえつつ

み名のおこころ

聞けよとか

み名のおこころ

聞くからは

称えるまが

南無の信

ことにておわします」の聖人の仰せが、先生の口から絶えず出て、これらを仰言るときの先生は、泌々と胸中深く戴くものがあるのを感じさせずにおかないものがありました。多比良の一女性―納屋の中で薬の上での療養生活二十年後恢復した人―先生がこの女性を納屋に見舞われた時の模様を語られました。この女性の生かされた力は何か、それは前掲の歌につきると思います。それを先生は私の為には仰りました。一日々々を立派に幕を閉じなければならぬ明日があると思つて今日の幕を閉じては駄目だ。ああしまった、もう今日はしようがない又明日やろうと、これでは駄目、一日一日立派に幕をしめて、静かに休む、これが吾々の生き方である。生きてゐるのは今日一日、明日を頼んではいけない。又明日を思い煩うな、と。

尚先生はよく申されました。光は求めるのではなくて与えられているのである、光を仰ぎ、光の前に立ち、光に向つて進むのを忘れはならぬ。而も、光の前に立つ心を次の様に語られました。無事に飛ぶ航空機も、一旦事故となる、無用の物を捨てて、いよいよ身につけた物も捨てて、機体を軽くし、最後には燃料までも捨てて身一つになつてまっしぐらに目的地に降り立つのである。身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ、と古人も言われるではないか、と。

その心は、見てござる、聞いてござる、知つてござるであります。(未完)

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

おねんぶつさまは

おねんぶつさまは

どこから来たの

西方十萬億仏土

過ぎたところに

国がある

その国 無量光明土

この世をつつんで

照らして

おねんぶつさまは

お浄土からか

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

眼 (め)

眼

眼

眼

その眼がいつも
わたしを
とらえている——

// 煩惱にまなこ

さえられて

へ 撰取の心光

見ざれども

大悲ものうき

ことなくて

つねにわが身を

照らすなり—— //

眼 眼 眼

その眼がいつも——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

// 名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もどまらず

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし //

煩惱・逆謗

みなつつんで

煩惱・逆謗

みな容(い)れて

ナムアミダブツは

功德の宝海

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

有情(うじょう)をよぼうて

船が来た

船が来た

お浄土行きの

船が来た

ああ

三信の

切々たることよ

ああ

三信の

切々たることよ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

どうおもっても

だれが

どうおもっても

ナムアミダブツ

わたしが

どうおもっても

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツの

船が来た

いそげ皆ひと

船が来た

// 弥陀・観音・大勢至

大願の船に乗してぞ

生死の海にうかみつつ

有情をよぼうて乗せたもう //

有情をよぼうて

乗せたもう

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

其の名号に

// 弥陀の名号

称えつつ—— //

其の名号に

三信聞こゆ

// 至心・信樂

欲生我國—— //

智慧の念仏と信心の智慧

花田正夫

私わたくしは小鳥が巢ねを造り、卵たまごをあため、雛ひなを立派りっぱに育てているのをじつと観察して、小鳥には医師も産婆さんばも、教える者ものもないのにどうしてこれが出るのであろうか、この智慧ちゐが人間にも全分に發揮はつぱい出来たらなあ！と思いをこらした。そこに親鳥おやどりが子こになりきって渾然こんぜんと一体いつたいにとろけ、そこに子こに要よるものが親おやに要よるものとなって、自然じぜんに子こそだての実みが完成かんせいしている、この親子おやこ一体いつたいの心の尊たうとさを知らされた。

さて仏陀ぶつだは苦惱くなんの私共わたくしどもをみそなわして、一子いちこの如ごとく憐愍れんみんし、みこころの中なかにおさめ、救すくい逃にげずはやまじとの悲願ひがんから「衆生しゆじやう苦惱くなん、我わが苦惱くなん。衆生しゆじやう安樂あんらく、我わが安樂あんらく」と、同喜どうぎ同憂どうゆうして下さるのである。仏心ぶつしんの不思議ふしぎのはたらきはここから発動はつどうし、無限むげんの智慧ちゐと慈悲じゐと方便はんべんが顕現けんげんされ、倦うむことなく休やすむことなく私共わたくしどもにそがれている、その智慧ちゐ・慈悲じゐ・方便はんべんの至極しごくが「南無阿彌陀仏なんむあみだぶつ」の名号なごうである。南無なんむとは衆生しゆじやうである、阿彌陀あみだ仏ぶつが衆生しゆじやうを廣大無辺くわいだいむへんなみこころの中に

が、私共わたくしどもの浅薄せんぱくな分別ぶんべつ智ちでは、唯文字ただぶつごとナムアミダブツの音ね以外いげに感知かんし出来こないけれど、名号なごうは衆生しゆじやうと一つにとろけた仏ぶつのいきたまことのいのちである、火かが炭すすについて、炭すすのまんまが火かになつていのに譬たとえられよう。

さて、仏ぶつの智慧ちゐを「般若はんにや」というが、相對たいごう差別さべつをこえた絶対ぜったい智ちで、我々われらには心こころも言葉ことばもおよびもつかぬこころである。この絶対ぜったい智ちを我々われらに与あたえて、仏ぶつと同じさとの境涯きやうがいに導みちき入いれたいとの大慈大悲だいじだいひ心しんから、称なづえやすく、保たもちやすい言葉ことばとあらわれ、文字あざなとなつて、呼びかけ、働きかけて下さるので、法然上人ほつぜんじやうじんはこれを「選擇せんたく本願ほんがんの念仏ねんぶつ」と示してお勧めすすめ下さるのである。

正像しやうざう末和讃まわわさんに聖人せいじんは、

無碍むがい光くわう仏ぶつのみことには未来みらいの有情うじやう利り、せんとて、

大勢だいせい至し菩薩ぼさつに智慧ちゐの念仏ねんぶつすすめしむ

濁世じやくせいの有情うじやうをあわれみて、勢せい至し念仏ねんぶつすすめしむ

信心しんしんのひとを撰取せんしゆして浄土じやうどに帰入きやうにせしめけり

と、仏智ぶつちの権化くわんげにまします大勢だいせい至し菩薩ぼさつが煩惱ぼんなん具足ぐそくの我等われらが五濁ごじやくの世よにあって、はてしない苦海くかいに沈しづむ身を悲憐ひれんされ、智慧ちゐの念仏ねんぶつをすすめて下さるお蔭かげで信心しんしんの眼まなこを開ひらかせて下さることを讃仰さんぎやうしてられるが、それを具体的に申ませば、弥陀みだの化身くわんしん、勢せい至し菩薩ぼさつの示現しげん（じげん）にまします法然上人ほつぜんじやうじんに導みちかれて、地獄じやく一定いじやうの親鸞しんらん聖人せいじんが念仏ねんぶつ成じやう仏ぶつさせて

おさめとつて捨てたまわぬ姿すがたである。あだかも、親おやの胸むねの中に子こがいつも大切に抱かかられていて、子こが親おやにそむこうが、忘れわすれようが、どうあろうとも寸時すんじもはなさないのと同じである。

「孝経きやうけい」にも「大孝だいぎやう」の大切たいせつさが説とかれていて、それは子が親おやによく仕つかえるとか、大切にするとかいう所謂しゆいの孝行きやうぎやうは枝末えだすえのことで、大孝だいぎやうとは、老人らうじんと子供こどもとが一体いつたいになつて離わかれずとも、分わかけることも出来ない心こころ、それは親おやの胸むねに自然じぜんに宿とどまるもので、そこから無限むげんに親心おやこころが発動はつどうし、やがて子供こどもはその胸むねに安住地あんじちを見出し、親おやと子このへだての壁かべが破やぶられるので、その根源こんげんのこころを大孝だいぎやうと名なづけ、親おやと子こが二ふたにして一ひとつ、一ひとつにして二ふたの、対立たいりつをこえて、対立たいりつをとかず不思議ふしぎな力を教おしえられるが、この大孝だいぎやうは仏心ぶつしんの至極しごくの南無阿彌陀仏なんむあみだぶつのこころを暗示あんしする地上じやうじやうでの最大さいだいなものである。

聖人せいじんは「円融えんじゆう至徳しとくの嘉号かごうは、悪あくを転まじて徳とくを成じやうす正智しやうち」と名号なごうの智慧ちゐとその不思議ふしぎなはたらきを讃仰さんぎやうしてられる

頂たかげる身みになれたという御体験ごたいけんが根幹こんかんにあると思う。

聖人せいじんは更にその次の和讃わさんに、

智慧ちゐの念仏ねんぶつうることことは法蔵ほふざう願力がんりきのなせるなり

信心しんしんの智慧ちゐなかりせば、いかでか涅槃ねはんをさとらまし

と、仏ぶつの絶対ぜったい智ちがそのまま念仏ねんぶつとあらわれて、相對たいごう分別ぶんべつの虚妄きやうまうの我等われらに「称我名字しやうがななむと願ねんじ」て下さり、若ししその者が往生じやうじやう成じやう仏ぶつ出来ないならば「不取正覚ふしゆしやうかく」とお誓ちかい下さるのである。この誓願ちかがんがそのまま、我わがと造つくる罪業ざいごふの重おもみに沈しづみきつて浮かぶ瀬せのないわが身みのためであったと、仏ぶつのおまことをしていただく時とき、信心しんしんの智慧ちゐとひらけ、涅槃ねはんの光くわうがさしそめるのである。

私共わたくしどもをおさめとつて一体化いつたいげして下さる南無阿彌陀仏なんむあみだぶつのおまこと、私共わたくしどもの上にそがれていると知らされる時とき、仏心ぶつしんが凡心ぼんしんの中なかに入り満みちて下さり、仏心ぶつしんと凡心ぼんしんが一つになる時とき、信心しんしんの華はなが開ひらいて智慧ちゐがあらわれる。その智慧ちゐはわれ賢けんしとなるのでなく、夜道よみちには螢火えいかも目立めだつけれど、太陽たいやうが出でると螢えいの光くわうは強い光くわうに奪うばわれて赤い蛇へびまで照てらし出でされるように、今まで誇こほっていたわれ賢けんしの慢心まんしんが砕くだかれて、大光明界だいぐわうみやうがい裡らに浮かばせて下さり、我身わがみの愚かさぐさが照てらし出でされるのである。法然上人ほつぜんじやうじんが「浄土宗じやうどしゆの人ひとは愚者ぐしやになりて往生じやうじやうす」と言いわれ、御自身ごみづかみも、愚痴ぐしの法然坊ほつぜんぼうとも、白黒はくくわくもわからぬ盲めくらであり、是非しぜいも知らぬ童子どうしであると常に

仰言っているのも、智慧の念仏が信心の智慧とひらけて自然にそうした御自身が照らし出されたのである。

この如来から恵施された信心の智慧は、我々の上に仿いで転化作用となる。その主なものに転悪成徳がある、氷がとけて水に転ずるように罪障がそのまま転化されて功德となり、禍が転じてかえって跡かたもなくなる。次に四苦八苦のはてしない身によるこびがあたえられ、外の着物や内の持物でなく、人生手放しのよるこびの世界がひらかれる。更に、闇夜に道に迷う生活に光がさして来て、山は山、川は川、野原は野原と明らかになり、そこに我が行く道もおのずとあきらかになりはじめる。

これらは皆仏智の不思議に帰する者に、求めず願わぬに仏願力の自然として無限に与えられるめぐみであり、やがてこの仏智に導かれつゝ浄土への道がひらかれるのである。何という幸慶であろうか、何という不思議であろうか。

聖人はここに、次の和讃に

無明長夜の灯炬(とうこ)なり智眼くらしと悲しむな

生死大海の船筏なり、罪障おもととげかざれ

願力無窮にましますば、罪業深重もおもからず

仏智無辺にましますば、散乱放逸もすてられず

と、愚かなことも苦にするな、散乱し放逸の身をもいたず

ま永遠に続く友誼を恵まれるのである。

昭和四十九年 二月二十五日。

重ねて誓うらくは名声(みょうしょう)十方に聞こえん
(正信偈)

昨年末、山岳部の学生三十三人が立山で遭難し、七人は亡くなったが、無事に救出された人の話によると、猛吹雪で一寸先も見えず、方角も分らなくなった時、呼子の笛の音が唯一のたよりとなって、その方向に進んでようやく山小屋にたどりついたそうである。

この記事を読んで、すぐ心に浮かんだのが「名声十方に聞こえん！」との仏の重ねてのお誓いであった。煩惱の狂う荒野に智慧の眼のつぶれた我等めあてに、十方にひびく南無阿弥陀仏の御名が呼子の笛の音となって呼び続けて下さることのありがたさである。

しかし、自分の眼は正しく見える積りで居る間は、この呼び声を聞き流してしまいが、身びいきな心に障えられて善悪のけじめもつかず、自分の無常にも気が付き得ない身と知らされる時、この身を悲憐されて呼びかけられる御名のためにもしさに、障りの多い中にも自然に浄土への道が開かれて来る、仏陀の善巧の妙に心うたれる。

昭和四十九年 六月十日。

らに悲しむな、無辺の仏智、長夜の大灯炬まします、又罪障の深重なことを心配するな無限の願力、不沈の大船ましますと、言葉をつくして仏智不思議の念仏をおすすめ下さっている。
(稿了)

ともしび

まさに発願して彼国を願生すべし。其故は諸の上善人と俱会一処することを得ればなり (阿弥陀経)

私も七十になり過去を省みると、人と人で行き違いばかりして、真に会うということのむつかしさを知らされる。ただ利害得失によって集散離合して勝手次第という始末であった。まれに意気投合して利害を超えた交誼を誓い合っても、長い歳月に色あせていって、人生のさみしみのきわみに立たされる。

こうした時、フト博多の七里和上の語録に「陶器を重ねて箱にしまう時、間に紙をはさげると傷がつかない。人と人との交わりも、お念仏の紙が大切である」といったような言葉があったのを思い出し、和上もまたこの問題に苦労された挙句に、こうした念仏の徳光を見出されたのだなあと感銘した。飽くことを知らぬ利己の角(つの)で、われひと共に傷つき合う身に、仏の大悲の御手がさしのべられてお念仏とあらわれて下さる時、色々の問題を持ったまん

西岸上に人有り喚んで言く「汝、一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん (二河白道の譬)

近角先生に御縁の深かった青年が、生死もわからぬという大病で大手術を受けねばならぬとなった時、

「ドコドコマデモオミステナイオジヒナレバアンシン、ネンブツセラレヨ」

と先生は見舞の電報を打たれた。

生死の巖頭に立つ者に、すこしでも、あなれ、こうならねばの注文があったらたまったものではない。どういふぶざまな業(ごう)さらしになるうとも、そういう者こそいよいよおあきれなく、飽くまでもお見捨てなく護り抜いて下さる生きたおまこと一つあれば大安心である。先生はそのおまこと一つを単刀直入に病床にとどけられたのである。古歌に「一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行くぞうれしき」とある。こうした仏のおまことに支えられて、為すべきことも為し、肉身や知友とも心おきなく存分に別れを惜しみ合うことも出来るというものだ。

昭和四十九年 七月二十九日。

あとがき

今秋の一道会は池山先生の三十七回忌、白井先生の一周年、池山寿夫様の追悼会となり、集う者の胸に一期一会の感がひしひしと迫りました。蓮如上人は「われやさき人やさき」と仰言っていますが、私共は、人やさきわれやあと」と勝手にきめて、そのところが何時までも居坐っていて、いよいよの時は「突然死が前を塞ぐ」哀れさであります。

遠藤周作氏が「悪魔とはよく知られているが、善魔こそ本当の魔であろう。われよしと思ひこんで、そのために他人を裁き、さげすみ、苦しめていながら、自分の心にひそむエゴイズムや独善の害を知らないで飽くまで自分は善い事をしてると思ひこんでいる。本当の魔は自分の存在をかくすところにその怖ろしさがある」というようなことを書いている。無常を常と思ひ、苦を楽と錯覚し、愚者の故に愚者と気づかず、悪人は他にあつて自分は善人とひとりごめしている者のさだめとして「突然地獄の猛火が身を包む」ことであろう、危うし危うしである。

福島先生は小康を保たれておられますが、大学の講義はお止めになりました。

七月に頂きましたお手紙に

四十年の教の道に終へて
ただ一筋に仏の道行く。

教の道くりかへしつづつ五十年
此の人の世をたどり来にける。
とあり、九月十四日のおたよりには
こもり居て窓前の樹の深緑を
見ればさびしき心わらぐ。

とありました。御住所は、東京都世田谷区上北沢五の三十八の六であります。

新刊図書紹介

仏と人

附池山先生の生涯 池山栄吉著

定価 一五〇〇円 送料二〇〇円

京都市下京区堀川通花屋町、百華苑

振替京都 二五七八八番

宿業の大地に立ちて

西元 宗助著

定価 一〇〇〇円 送料一五〇円

百華苑出版

人間が人間になるために

東 昇著

定価 一五〇〇円

東京都千代田区神田小川町三の二三

東京古書会館ビル四階 第一書房

振替東京 三九一二〇番

△御案内▽

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜
午後一時半。 南区駈上町二の八八
一道会館

○教西寺法話会。毎月二十四日、
午前午後 昭和区小椋町三丁目
四番地。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 吉野穂志郎

名古屋南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七